

動物倫理日本語文献目録

浅野幸治

はじめに

動物倫理に関する、比較的最近の日本語文献（単行本）を集めました。翻訳本とそうでない本の両方を含みます。私の手元にある書籍、私の目に留まった書籍を中心に集めてあるので、包括的、網羅的ではありません。加えるべき文献があれば、教えていただければ幸いです。1966年以降の文献を集めてありますけれども、1966年という年に特に意味があるわけではありません。偶然、最初の文献が1966年だったにすぎません。1966年から年代順に並べてあります。各年内では、著者名（姓）の五十音順に並べてあります。

1966年

鯖田豊之、『肉食の思想——ヨーロッパ精神の再発見』、中央公論社。

1976年

藤原英司、『アメリカの野生動物保護』、中央公論社。

1978年

全国肉用牛協会、『日本肉用牛変遷史』、全国肉用牛協会。

1979年

ルース・ハリソン、『アニマル・マシーン——近代畜産にみる悲劇の主役たち』橋本明子訳、講談社。

1980年

リチャード・ドーキンス、『生物＝生存機械論——利己主義と利他主義の生物学』日高敏隆訳、紀伊國屋書店。

1982年

川崎泉、『動物園の獣医さん』、岩波書店。

波岡茂郎、『家畜はいずこへ——ある食肉恐慌論』、講談社。

ジム・メイソン&ピーター・シンガー、『アニマル・ファクトリー——飼育工場の動物たちの今』高松修訳、現代書館。

フランシス・ムア・ラッペ、『小さな惑星の緑の食卓——現代人のライフ・スタイルをかえる新食物読本』奥沢喜久栄訳、講談社。

1985年

太田竜、『家畜制度全廃論序説——動物と人間は兄弟だった』、新泉社。

平澤正夫、『消えゆく野生と自然——動物たちに何が起きているか』、三一書房。

1986年

太田竜、『声なき犠牲者たち——動物実験全廃へ向けて』、現代書館。

ピーター・シンガー編、『動物の権利』戸田清訳、技術と人間。

藤原英司、『雪国のライオン——地球は人間だけのものなのか』、集英社。

1988年

ピーター・シンガー、『動物の解放』戸田清訳、技術と人間。

1989年

キース・トマス、『人間と自然——近代イギリスにおける自然観の変遷』山内昶監訳、法政大学出版局。

マイルズ・バートン、『みなおされる動物の権利』小原秀雄監訳、佑学社。

1990年

池上俊一、『動物裁判——西欧中世・正義のコスモス』、講談社。

藤原英司、『死に絶える動物たち』、JICC出版局。

デズモンド・モリス、『動物との契約——人間と自然の共存のために』渡辺政隆訳、平凡社。

1991年

ポール・シェパード、『動物論——思考と文化の起源について』寺田鴻訳、どうぶつ社。

ハンス・リーシュ、『罪なき者の虐殺——動物実験全廃論』荒木敏彦／戸田清訳、新泉社。

1992年

イングリッド・ニューカーク、『子どもたちが動物を救う101の方法』AVA-net 翻訳チーム訳、新泉社。

1993年

野上ふさ子、『動物実験を考える——医学にもエコロジーを』、三一書房。

シュレーダー＝フレチェット編、『環境の倫理 上』京都生命倫理研究会訳、晃洋書房。

ジェレミー・リフキン、『脱牛肉文明への挑戦——繁栄と健康の神話を撃つ』北濃秋子訳、ダイヤモンド社。

1994年

キャロル・アダムズ、『肉食という性の政治学——フェミニズム-ベジタリアニズム批評』鶴田静訳、新宿書房。

リチャード・オバリー、『イルカがほほえむ日』野崎友璃香監修、TBSブリタニカ。
——、『イルカのハッピーフェイス』柳沢玲一郎訳、地湧社。

ジェーン・グドール、『心の窓——チンパンジーとの30年』高崎和美／高崎浩幸／伊谷純一郎訳、どうぶつ社。

ジェイムズ・ターナー、『動物への配慮——ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』斎藤九一訳、法政大学出版局。

レナーテ・ヘロルド、『小さな友だちのために——もうこれ以上、犬や猫を不幸にしないで!』、どうぶつ出版。

ジョン・C・リリー、『イルカと話す日』神谷敏郎／尾澤和幸訳、NTT出版。

1995年

塚本学、『江戸時代人と動物』、日本エディタースクール出版部。

ローレンス・プリングル、『動物に権利はあるか』田邊治子訳、NHK出版。

1996年

今川勲、『犬の現代史』、現代書館。

ジェーン・グドール、『森の隣人——チンパンジーと私』河合雅雄訳、朝日新聞社。

ケネス・S・ノリス、『イルカ入門』辛島司郎／篠原正典／森貴久訳、どうぶつ社。

1997年

河野修一郎、『目に見えない危険——暮らしの中に溢れる化学物質』、みすず書房。

鶴田静、『ベジタリアンの世界——肉食を超えた人々』、人文書院。

米本昌平、『クローン羊の衝撃』、岩波書店。

ハンス・リーシュ編、『医療の犯罪——1000人の医師の証言』太田龍訳、三交社。

1998年

今村英成、『へそ曲がり獣医さんの動物福祉論——動物実験をとりまく諸問題にメスを入れる』、アニメック。

フランス・ドゥ・ヴァール、『利己的なサル、他人を思いやるサル——モラルはなぜ生まれたのか』西田利貞／藤井留美訳、草思社。

桑原崇寿、『実験犬ラッキー——ボクたち友だちなのに、なぜ?』、ハート出版。
ピーター・コックス、『新版 ぼくが肉を食べないわけ』浦和かおる訳、築地書館。
中村元／田辺祥二、『ブッダの人と思想』、NHK 出版。

1999 年

宇都宮直子、『ペットと日本人』、文藝春秋。
ピーター・シンガー、『実践の倫理 新版』山内友三郎／塚崎智監訳、昭和堂。
中央畜産会、『畜産行政史——戦後半世紀の歩み』、中央畜産会。
ロデリック・F・ナッシュ、『自然の権利——環境倫理の文明史』松野弘訳、筑摩書房。
浜井千恵、『この子達を救いたい』、エフエー出版。
リン・ホワイト、『機械と神——生態学的危機の歴史的根源』青木晴三訳、みすず書房。
レスリー・J・ロジャース、『意識する動物たち——判断するオウム、自覚するサル』長
野敬／赤松真紀訳、青土社。

2000 年

小野勇一、『ニホンカモシカのとどった道——野生動物との共生を探る』、中央公論新社。
ジョン・B・カブ、『生きる権利 死ぬ権利』延原時行訳、日本基督教団出版局。
ジェーン・グドール&フィリップ・バーマン、『森の旅人』上野圭一訳、角川書店。
グレーフェ彥子、『ドイツの犬はなぜ幸せか——犬の権利、人の義務』、中央公論新社。
児玉小枝、『どうぶつたちへのレクイエム』、桜桃書房。
ロジャー・ファウツ／ステイヴン・タケル・ミルズ、『限りなく人類に近い隣人が教え
てくれたこと』高崎浩幸／和美訳、角川書店。
マルコ・ブルーノ、『マルコの東方犬聞録——日本の犬だけには生まれ変わりたくない!』、
ハート出版。

2001 年

伊藤宏、『食べ物としての動物たち——牛、豚、鶏たちが美味しい食材になるまで』、講談
社。
井上夕香、『実験犬シロのねがい——捨てないで! 傷つけないで! 殺さないで!』、ハート
出版。
パオラ・カヴァリエリ／ピーター・シンガー、『大型類人猿の権利宣言』山内友三郎／西
田利貞監訳、昭和堂。
フレデリック・J・シムーンズ、『肉食タブーの世界史』山内昶監訳、法政大学出版局。
エリック・シュローサー、『ファーストフードが世界を食いつくす』楡井浩一訳、草思社。
動物の権利のための獣医師会、『動物の権利のための獣医師会方針声明』AVA-net 翻訳チ
ーム訳、動物実験廃止・全国ネットワーク。
中村生雄、『祭祀と供犠——日本人の自然観・動物観』、法蔵館。

浜井千恵、『動物サミット 2001』、エフエー出版。

羽山伸一、『野生動物問題』、地人書館。

デボラ・ブラム、『なぜサルを殺すのか——動物実験とアニマルライト』寺西のぶ子訳、白揚社。

辺見栄、『ケイコという名のオルカ——水族館から故郷の海へ』、集英社。

ハリエット・リトヴォ、『階級としての動物——ヴィクトリア時代の英国人と動物たち』三好みゆき訳、国文社。

A・リンゼイ、『神は何のために動物を造ったのか——動物の権利の神学』宇都宮秀和訳、教文館。

2002年

青木人志、『動物の比較法文化——動物保護法の日欧比較』、有斐閣。

鶴田静、『ベジタリアンの文化誌』、中央公論新社。

成田青央、『ペット虐待列島——動物たちの異議申し立て』、リベルタ出版。

林良博／近藤誠司／高槻成紀共著、『ヒトと動物——野生動物・家畜・ペットを考える』、朔北社。

アラン・ベック／アーロン・キャッチャー、『あなたがペットと生きる理由——人と動物の共生の科学』横山章光監修、ペットライフ社。

ハワード・F・ライマン／グレン・マーザー、『まだ、肉を食べているのですか——あなたの「健康」と「地球環境」の未来を救う唯一の方法』船瀬俊介訳、三交社。

ハンス・リューシュ、『罪なきものの虐殺——動物実験全廃論』荒木敏彦／戸田清訳、新泉社。

2003年

J・M・クツェー、『動物のいのち』森祐希子／尾関周二訳、大月書店。

デヴィッド・ドゥグラツィア、『動物の権利』戸田清訳、岩波書店。

中村三郎、『肉食が地球を減ぼす』、双葉社。

野上ふさ子、『新・動物実験を考える——生命倫理とエコロジーをつないで』、三一書房。

2004年

青木人志、『法と動物——ひとつの法学講義』、明石書店。

佐藤良夫、『カタカナの墓碑』、ジュリアン出版局。

ドナルド・スタル／マイケル・ブロードウェイ、『だから、アメリカの牛肉は危ない——北米精肉産業の恐怖の実態』中谷和男訳、河出書房新社。

チャールズ・バーチ／ルーカス・フィッシャー、『動物と共に生きる』岸本和世訳、日本キリスト教団出版局。

福岡賢正、『隠された風景——死の現場を歩く』、南方新社。

エリック・マーカス、『もう肉も卵も牛乳もいらない！——完全菜食主義「ヴィーガニズム」のすすめ』酒井泰介訳、早川書房。

ジョナサン・マークス、『98%チンパンジー——分子人類学から見た現代遺伝学』長野敬／赤松真紀訳、青土社。

松木洋一／永松美希編著、『日本とEUの有機畜産——ファームアニマルウェルフェアの実際』、農山漁村文化協会。

丸山徳次編、『岩波応用倫理学講義2 環境』、岩波書店。

森達也、『いのちの食べかた』、理論社。

ピーター・ローベンハイム、『私の牛がハンバーガーになるまで——牛肉と食文化をめぐる、ある真実の物語』石井礼子訳、日本教文社。

2005年

大上泰弘、『動物実験の生命倫理——個体倫理から分子倫理へ』、東信堂。

加藤尚武、『環境と倫理 新版——自然と人間の共生を求めて』、有斐閣。

ヘルムート・F・カプラン、『死体の晚餐——動物の権利と菜食の理由』ニトライ陽子／田辺リユーディア／まきぼう訳、同時代社。

蒲原聖可、『ベジタリアンの医学』、平凡社。

佐藤衆介、『アニマルウェルフェア——動物の幸せについての科学と倫理』、東京大学出版会。

マリアン・S・ドーキンズ、『動物たちの心の世界』長野敬他訳、青土社。

マーク・ベコフ、『動物の命は人間より軽いのか——世界最先端の動物保護思想』藤原英司／辺見栄訳、中央公論新社。

ジェフリー・M・マッソン、『豚は月夜に歌う——家畜の感情世界』村田綾子訳、バジリコ。

三島亜紀子、『児童虐待と動物虐待』、青弓社。

2006年

フランク・R・アシオーン、『子どもが動物をいじめるとき——動物虐待の心理学』横山章光訳、ビイングネットプレス。

淡路剛久／川本隆史／上田和弘／長谷川公一編、『リーディングス環境第2巻 権利と価値』、有斐閣。

川端裕人、『動物園にできること——「種の方舟」のゆくえ』、筑摩書房。

テンプル・グランディン／キャサリン・ジョンソン、『動物感覚——アニマル・マインドを読み解く』中尾ゆかり訳、NHK出版。

小菅正夫／岩野俊郎／島泰三編、『戦う動物園——旭山動物園と到津の森公園の物語』、中央公論新社。

高槻成紀、『野生動物と共存できるか——保全生態学入門』、岩波書店。

田上孝一、『実践の環境倫理学——肉食・タバコ・クルマ社会へのオルタナティブ』、時潮社。

根崎光男、『生類憐みの世界』、同成社。

渡邊洋之、『捕鯨問題の歴史社会学——近現代日本におけるクジラと人間』、東信堂。

2007年

内澤句子、『世界屠畜紀行』、解放出版社。

菅原潤、『環境倫理学入門——風景論からのアプローチ』、昭和堂。

ジョン・ティルストン、『わたしが肉食をやめた理由』小川昭子訳、日本教文社。

C・W・ニコル、『鯨捕りよ、語れ!』、アートデイズ。

チャールズ・パターソン、『永遠の絶滅収容所——動物虐待とホロコースト』、緑風出版。

ジョナサン・バルコム、『動物たちの喜びの王国』土屋晶子訳、インターシフト。

藤田和生、『動物たちのゆたかな心』、京都大学学術出版会。

ホリコシアイコ、『いっしょに歩こう——元実験犬ハッピーの物語』、新風舎。

ゲイル・F・メルスン、『動物と子どもの関係学——発達心理からみた動物の意味』横山章光／加藤謙介監訳、ビイングネットプレス。

2008年

浅川千尋、『国家目標規定と社会権——環境保護、動物保護を中心に』、日本評論社。

阿部亮、『新版 家畜飼育の基礎』、農山漁村文化協会。

池谷和信／林良博編、『ヒトと動物の関係学第4巻 野生と環境』、岩波書店。

石田戠、『現代日本人の動物観——動物とのあやしげな関係』、ビイング・ネット・プレス。

伊勢田哲治、『動物からの倫理学入門』、名古屋大学出版会。

エリザベート・ド・フォントネ、『動物たちの沈黙——《動物性》をめぐる哲学試論』石田和男／小幡谷友二／早川文敏訳、彩流社。

西山ゆう子、『アメリカ動物診療記——プライマリー医療と動物倫理』、駒草出版。

野村達次／飯沼和正、『私史・日本の実験動物45年——実験動物中央研究所の記録1947～1991』、慶應義塾大学出版会。

——、『イン・ビボ実験医学を拓く——実験動物中央研究所からの報告1990～2008』、慶應義塾大学出版会。

三浦耕吉郎編著、『屠場 みる・きく・たべる・かく——食肉センターで働く人びと』、晃洋書房。

森裕司／奥野卓司編、『ヒトと動物の関係学第3巻 ペットと社会』、岩波書店。

山内友三郎／浅井篤編、『シンガーの実践倫理を読み解く——地球時代の生き方』、昭和堂。

2009年

秋篠宮文仁／林良博編、『ヒトと動物の関係学第2巻 家畜の文化』、岩波書店。

マイケル・アップルビー／バリー・ヒューズ編著、『動物への配慮の科学——アニマルウェルフェアをめざして』佐藤衆介／森裕司監修、チクサン出版社。

奥野卓司／秋篠宮文仁編、『ヒトと動物の関係学第1巻 動物観と表象』、岩波書店。

河合雅雄／林良博編著、『動物たちの反乱——増えすぎるシカ、人里へ出るクマ』、PHP 研究所。

佐川光晴、『牛を屠る』、解放出版社。

菅豊編、『人と動物の日本史3 動物と現代社会』、吉川弘文館。

中村生雄／三浦佑介編、『人と動物の日本史4 信仰のなかの動物たち』、吉川弘文館。

マイケル・ポーラン、『雑食動物のジレンマ——ある4つの食事の自然史』ラッセル秀子訳、東洋経済新報社。

松井正文、『外来生物クライシス——皇居の池もウシガエルだらけ』、小学館。

ライアル・ワトソン、『思考する豚』福岡伸一訳、木楽舎。

2010年

飯田基晴、『犬と猫と人間と——いのちをめぐる旅』、太郎次郎社エディタス。

池谷和信編、『日本列島の野生動物と人』、世界思想社。

川端裕人、『イルカと泳ぎ、イルカを食べる』、筑摩書房。

佐々木正明、『シー・シェパードの正体』、扶桑社。

正田陽一編、『品種改良の世界史——家畜編』、悠書館。

関口雄祐、『イルカを食べちゃダメですか？ 科学者の追い込み漁体験記』、光文社。

コーラ・ダイヤモンド／スタンリー・カヴェル／ジョン・マクダウェル／イアン・ハッキング／ケアリー・ウルフ、『＜動物のいのち＞と哲学』中川雄一訳、春秋社。

フランス・ドゥ・ヴァール、『共感の時代へ——動物行動学が教えてくれること』柴田裕之訳、紀伊國屋書店。

なかのまきこ、『野宿に生きる、人と動物』、駒草出版。

中村生雄、『日本人の宗教と動物観——殺生と肉食』、吉川弘文館。

原田信男、『日本人はなにを食べてきたか』、KADOKAWA。

馬淵浩二、『倫理空間への問い——応用倫理学から世界を見る』、ナカニシヤ出版。

八神健一、『ノックアウトマウスの一生——実験マウスは医学に何をもたらしたか』、技術評論社。

ジェームズ・レイチェルズ、『ダーウィンと道徳的個体主義——人間はそんなに偉いのか』古牧徳生／次田憲和訳、晃洋書房。

バーナード・ローリン、『獣医倫理入門——理論と実践』浜名克己監訳、白揚社。

若生謙二、『動物園革命』、岩波書店。

2011年

ジョルジョ・アガンベン、『開かれ——人間と動物』岡田温司／多賀健太郎訳、平凡社。

石井敦編著、『解体新書「捕鯨論争」』、新評論。
石川創、『クジラは海の資源か神獣か』、NHK 出版。
一ノ瀬正樹、『死の所有——死刑・殺人・動物利用に向きあう哲学』、東京大学出版会。
一ノ瀬正樹／新島典子編、『ヒトと動物の死生学——犬や猫との共生、そして動物倫理』、
秋山書店。
太田康介、『のこされた動物たち——福島第一原発 20 キロ圏内の記録』、飛鳥新社。
粕谷俊雄、『イルカ——小型鯨類の保全生物学』、東京大学出版会。
河島基弘、『神聖なる海獣——なぜ鯨が西洋で特別扱いされるのか』、ナカニシヤ出版。
テンプル・グランディン、『動物が幸せを感じる時——新しい動物行動学でわかるアニ
マル・マインド』中尾ゆかり訳、NHK 出版。
小林照幸、『ペット殺処分——ドリームボックスに入れられる犬猫たち』、河出書房新社。
エティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック、『動物論——デカルトとビュフォン氏の見解
に関する批判的考察を踏まえた、動物の基本的諸能力を解明する試み』、古茂田宏
訳、法政大学出版局。
ピーター・シンガー、『動物の解放 改訂版』戸田清訳、人文書院。
中村生雄、『肉食妻帯考——日本仏教の発生』、青土社。
ハロルド・ハーツォグ、『ぼくらはそれでも肉を食う——人と動物の奇妙な関係』山形浩
生／守岡桜／森本正史訳、柏書房。
ジョナサン・サフラン・フォア、『イーティング・アニマル——アメリカ工場式畜産の難
題』黒川由美訳、東洋書林。
藤崎童士、『殺処分ゼロ——先駆者・熊本市動物愛護センターの軌跡』、三五館。
米国アカデミー米国研究協議会、『実験動物の管理と使用に関する指針 第 8 版』日本実
験動物学会監訳、アドスリー。
吉岡逸夫、『白人はイルカを食べても OK で日本人は NG の本当の理由』、講談社。
ジェームズ・レイチェルズ、『倫理学に答えはあるか——ポスト・ヒューマニズムの視点
から』古牧徳生／次田憲和訳、世界思想社。

2012 年

池田慎市、『めざせ！ 養豚場の星』、緑書房。
金森修、『動物に魂はあるのか——生命を見つめる哲学』、中央公論新社。
岸上伸啓編、『捕鯨の文化人類学』、成山堂書店。
マーサ・C・ヌスバウム、『正義のフロンティア——障害者・外国人・動物という境界を
越えて』神島裕子訳、法政大学出版局。
野上ふさ子、『いのちに共感する生き方——人も自然も動物も』、彩流社。
羽山伸一／土居利光／成島悦雄編著、『野生との共存——行動する動物園と大学』、地人書
館。
ヴィクトリア・ブレイスウェイト、『魚は痛みを感じるか？』高橋洋訳、紀伊國屋書店。

米国応用研究倫理協会／実験動物福祉局、『動物実験委員会ガイドブック』日本実験動物環境研究会編、アドスリー。

松木洋一監修、『人間動物関係論——多様な生命が共生する社会へ』、養賢堂。

村山司、『イルカの認知科学——異種間コミュニケーションへの挑戦』、東京大学出版会。

W・M・S・ラッセル／R・L・バーチ、『人道的な実験技術の原理——動物実験技術の基本原則 3R の原点』笠井憲雪訳、アドスリー。

2013 年

池本卯典／吉川泰弘／伊藤伸彦監修、『獣医学教育モデル・コア・カリキュラム準拠 獣医倫理・動物福祉学』、緑書房。

石田戢／濱野佐代子／花園誠／瀬戸口明久、『日本の動物観——人と動物の関係史』、東京大学出版会。

太田匡彦、『犬を殺すのは誰か——ペット流通の闇』、朝日新聞出版。

梶光一／鈴木正嗣／伊吾田宏正編、『野生動物管理のための狩猟学』、朝倉書店。

片野ゆか、『保健所犬の飼い主になる前に知っておきたいこと』、新潮社。

キャス・R・サンスティン／マーサ・C・ヌスバウム編、『動物の権利』阿部圭介／山本龍彦／大林啓吾監訳、尚学社。

高槻成紀、『動物を守りたい君へ』、岩波書店。

田中正之、『生まれ変わる動物園——その新しい役割と楽しみ方』、化学同人。

塚本学、『生類をめぐる政治——元禄のフォークロア』、講談社。

ジャン＝クリストフ・バイイ、『思考する動物たち——人間と動物との共生をもとめて』石田和男・山口俊洋訳、出版館ブック・クラブ。

ダナ・ハラウェイ、『犬と人が出会うとき——異種協働のポリティクス』高橋さきの訳、青土社。

——、『伴侶種宣言——犬と人の「重要な他者性」』永野文香訳、以文社。

安田章人、『護るために殺す？——アフリカにおけるスポーツハンティングの「持続可能性」と地域社会』、勁草書房。

山口拓美、『利用と搾取の経済倫理——エクスプロイトーションの概念』、白桃書房。

和田一雄、『ジビエを食べれば「害獣」は減るのか——野生動物問題を解くヒント』、八坂書房。

2014 年

大森享、『野生動物保全教育実践の展望——知床ヒグマ学習、イリオモテヤマネコ保護活動、東京ヤゴ救出作戦』、創風社。

小島筆夫、『化粧品・医薬部外品安全性評価試験法——動物実験代替法のすべてがわかる』、じほう。

片野ゆか、『ゼロ！ 熊本市動物愛護センター10年の闘い』、集英社。

バーバラ・J・キング、『死を悼む動物たち』秋山勝訳、草思社。
谷田創／木場有紀、『保育者と教師のための動物介在教育入門』、岩波書店。
ジャック・デリダ、『動物を追う、ゆえに私は（動物で）ある』鶴飼哲訳、筑摩書房。
フランス・ドゥ・ヴァール、『道徳性の起源——ボノボが教えてくれること』柴田裕之訳、
紀伊國屋書店。
日本農業新聞取材班、『鳥獣害ゼロへ！——集落は私たちが守るッ』、こぶし書房。
マーク・ベコフ、『動物たちの心の科学——仲間に尽くすイヌ、喪に服すゾウ、フェアプ
レイ精神を貫くコヨーテ』高橋洋訳、青土社。
ジョン・ホーマンズ、『犬が私たちがパートナーを選んだわけ——最新の犬研究からわか
る、人間の「最良の友」の起源』仲達志訳、阪急コミュニケーションズ。
村田浩一／成島悦雄／原久美子編、『動物園学入門』、朝倉書店。
ロブ・レイドロウ、『とらわれの野生——動物園のあり方を考える』山崎恵子監修、リベ
ルタ出版。

2015年

石井敦／真田康弘、『クジラコンプレックス——捕鯨裁判の勝者はだれか』、東京書籍。
伊勢田哲治、『マンガで学ぶ動物倫理——わたしたちは動物とどうつきあえばよいのか』、
化学同人。
一ノ瀬正樹・正木春彦編、『東大ハチ公物語——上野博士とハチ、そして人と犬のつなが
り』、東京大学出版会。
上野吉一／武田庄平編著、『動物福祉の現在——動物とのより良い関係を築くために』、農
林統計出版。
大岳美帆、『子犬工場——いのちが商品にされる場所』、WAVE 出版。
大和田一雄監修、『アニマルマネジメント III——動物実験体制の円滑な運用に向けてのヒ
ント』、アドスリー。
エリザベス・オリバー、『日本の犬猫は幸せか——動物保護施設アークの 25 年』、集英社
新書。
笠井憲雪監修、『ありがとう実験動物たち』、岩崎書店。
荻米一志、『殺生と往生のあいだ——中世仏教と民衆生活』、吉川弘文館。
ローリー・グルーエン、『動物倫理入門』河島基弘訳、大月書店。
ピーター・シンガー、『あなたが世界のためにできるたったひとつのこと——＜効果的な
利他主義＞のすすめ』関美和訳、NHK 出版。
末木文美士、『草木成仏の思想——安然と日本人の自然観』、サンガ。
高槻成紀、『シカ問題を考える——バランスを崩した自然の行方』、山と溪谷社。
高槻成紀、『となりの野生動物——暮らし・環境・人との関わり』、ベレ出版。
高槻成紀編著、『動物のいのちを考える』、朔北社。
伴野準一、『イルカ漁は残酷か』、平凡社。

日本動物心理学会監修、『動物たちは何を考えている？——動物心理学の挑戦』、技術評論社。

アントニー・ノチェッラ二世／コリン・ソルター／ジュディー・K・C・ベントリー、『動物と戦争——真の非暴力へ、《軍事-動物産業》複合体に立ち向かう』井上太一訳、新評論。

藤田和生、『誤解だらけの“イヌの気持ち”——「イヌのこころ」を科学する』、財界展望新社。

八木宏典監修、『図解 知識ゼロからの畜産入門』、家の光協会。

フィリップ・リンベリー／イザベル・オークショット、『ファーマゲドン——安い肉の本当のコスト』野中香方子訳、日経BP社。

2016年

青木人志、『日本の動物法 第2版』、東京大学出版会。

浅野明子、『ペット判例集——ペットをめぐる判例から学ぶ』、大成出版社。

ベン・イザキヤット、『動物の権利の実践——合法的に、確信とともに』アニマルライツセンター翻訳ボランティア編訳、アニマルライツパブリッシング。

ダニエル・インホフ編、『動物工場——工場式畜産 CAFO の危険性』井上太一訳、緑風出版。

打越愛子、『日本の動物政策』、ナカニシヤ出版。

テッド・ジェノウェイズ、『屠殺——監禁畜舎・食肉処理場・食の安全』井上太一訳、緑風出版。

シンジルト／奥野克己編、『動物殺しの民族誌』、昭和堂。

杉本彩、『それでも命を買い取りますか？ ペットビジネスの闇を支えるのは誰だ』、ワニブックス。

祖田修、『鳥獣害——動物たちと、どう向きあうか』、岩波書店。

東京弁護士会公害・環境特別委員会編、『動物愛護法入門——人と動物の共生する社会の実現へ』、民事法研究会。

スー・ドナルドソン／ウィル・キムリッカ、『人と動物の政治共同体——「動物の権利」の政治理論』青木人志／成廣孝監訳、尚学社。

デビッド・A・ナイバート、『動物・人間・暴虐史——“飼い貶し”の大罪、世界紛争と資本主義』井上太一訳、新評論。

ナショナルジオグラフィック編、『ナショジオと考える地球と食の未来』、日経ナショナルジオグラフィック社。

ユヴァル・ノア・ハラリ、『サピエンス全史（上）——文明の構造と人類の幸福』柴田裕之訳、河出書房新社。

フレッド・ピアス、『外来種は本当に悪者か？——新しい野生』藤井留美訳、草思社。

船瀬俊介、『菜食で平和を！』、キラジェンヌ。

古牧徳生編、『神と生命倫理』、晃洋書房。

松木洋一編著、『日本と世界のアニマルウェルフェア畜産〈上巻〉人も動物も満たされて生きる』、養賢堂。

2017年

赤嶺淳、『鯨を生きる——鯨人の個人史・鯨食の同時代史』、吉川弘文館。

ミカエル・C・アップルビー／ジョイ・A・メンチ／I・アンナ・S・オルソン／バリー・O・ヒューズ、『動物福祉の科学——理念・評価・実践』佐藤衆介／加隈良枝監訳、緑書房。

シェリー・F・コーブ、『肉食への疑問に答える13章——生き方が変わる、生き方を変える』井上太一訳、新評論。

佐々木芽生、『おクジラさま——ふたつの正義の物語』、集英社。

マルタ・ザラスカ、『人類はなぜ肉食をやめられないのか——250万年の愛と妄想のはてに』小野木明恵訳、インターシフト。

マイケル・A・スラッシャー、『動物実験の闇——その裏側で起こっている不都合な真実』井上太一訳、合同出版。

ジョン・ソレンソン、『捏造されるエコテロリスト』井上太一訳、緑風出版。

田上孝一、『環境と動物の倫理』、本の泉社。

田上孝一編、『権利の哲学入門』、社会評論社。

本庄萌、『世界のアニマルシェルターは、犬や猫を生かす場所だった。』、ダイヤモンド社。

2018年

赤江雄一編、『飼う——生命の教養学13』、慶應義塾大学出版会。

浅川千尋／有馬めぐむ、『動物保護入門——ドイツとギリシャに学ぶ共生の未来』、世界思想社。

依田賢太郎、『いきものをとむらう歴史——供養・慰霊の動物塚を巡る』、社会評論社。

鶴飼秀徳、『ペットと葬式——日本人の供養心をさぐる』、朝日新聞出版。

打越綾子編、『人と動物の関係を考える——仕切られた動物観を超えて』、ナカニシヤ出版。

枝廣淳子、『アニマルウェルフェアとは何か——倫理的消費と食の安全』、岩波書店。

クリス・D・トマス、『なぜわれわれは外来生物を受け入れる必要があるのか』上原ゆうこ訳、原書房。

中村宗之／岡田千尋、『日本の動物達に起きていること——畜産：アニマルライツとウェルフェア』、アニマルライツセンター。

野林厚志編、『肉食行為の研究』、平凡社。

羽山伸一監修、『災害動物医療——動物を救うことが人命や環境を守る』、ファームプレス。

檜垣立哉、『食べることの哲学』、世界思想社。

ディーター・ビルンバッハー、『生命倫理学——自然と利害関心の間』加藤泰史／高畑祐

人／中澤武監訳、法政大学出版局。

J・ファインバーグ、『倫理学と法学の架橋——ファインバーグ論文選』嶋津格／飯田巨之編集・監訳、東信堂。

ゲイリー・L・フランシオン、『動物の権利入門——わが子を救うか、犬を救うか』井上太一訳、緑風出版。

松木洋一編著、『日本と世界のアニマルウェルフェア畜産＜下巻＞アニマルウェルフェア・フードシステムの開発』、養賢堂。

アラスデア・マッキンタイア、『依存的な理性的動物——ヒトにはなぜ徳が必要か』高島和哉訳、法政大学出版局。

2019年

生田武志、『いのちへの礼儀——国家・資本・家族の変容と動物たち』、筑摩書房。

石川伸一、『「食べること」の進化史——培養肉・昆虫食・3Dフードプリンタ』、光文社。

太田匡彦、『「奴隷」になった犬、そして猫』、朝日新聞出版。

菊地理夫／有賀誠／田上孝一編、『徳と政治——徳倫理と政治哲学の接点』、晃洋書房。

ロナルド・L・サンドラー、『食物倫理入門——食べることの倫理学』馬淵浩二訳、ナカニシヤ出版。

ジェームズ・スタネスク／ケビン・カミングス、『侵略者は誰か？——外来種・国境・排外主義』井上太一訳、以文社。

戸田剛文編、『今からはじめる哲学入門』、京都大学学術出版会。

仁科邦男、『「生類憐みの令」の真実』、草思社。

羽山伸一、『野生動物問題への挑戦』、東京大学出版会。

リチャード・ハリス、『生命科学クライシス——新薬開発の危ない現場』寺町朋子訳、白揚社。

リチャード・C・フランシス、『家畜化という進化——人間はいかに動物を変えたか』西尾香苗訳、白揚社。

マーク・ホーソーン、『ビーガンという生き方』井上太一訳、緑風出版。

ピーター・P・マラ／クリス・サンテラ、『ネコ・かわいい殺し屋——生態系への影響を科学する』岡奈理子／山田文雄／塩野崎和美／石井信夫訳、築地書館。

森映子、『犬が殺される——動物実験の闇を探る』、同時代社。

バーナード・ローリン、『動物倫理の新しい基礎』高橋優子訳、白揚社。

若山三千彦、『看取り犬・文福の奇跡』、東邦出版。

2020年

垣本充／大谷ゆみこ、『完全菜食があなたと地球を救う ヴィーガン』、ロングセラーズ。

岸上伸啓編、『捕鯨と反捕鯨のあいだに——世界の現場と政治・倫理的問題』、臨川書店。

バーバラ・キング、『私たちが食べる動物の命と心』須部宗生訳、緑書房。

児玉聡、『実践・倫理学——現代の問題を考えるために』、勁草書房。
ポール・シャピロ、『クリーンミート——培養肉が世界を変える』鈴木素子訳、日経 BP。
杉本彩、『動物たちの悲鳴が聞こえる——続・それでも命を買いますか？』、ワニブックス。
スナウラ・テイラー、『荷を引く獣たち——動物の解放と障害者の解放』今津有梨訳、洛北出版。
エリーズ・ドゥソルニエ、『牛乳をめぐる 10 の神話』井上太一訳、緑風出版。
信岡朝子、『快樂としての動物保護——『シートン動物記』から『ザ・コーヴ』へ』、講談社。
宮園健吾／大谷弘／乗立雄輝編、『因果・動物・所有——一ノ瀬哲学をめぐる対話』、武蔵野大学出版会。
テリー・L・メイプル／ボニー・M・パーデュー、『動物園動物のウェルフェア』岩野俊郎訳、養賢堂。
森映子、『増補改訂版 犬が殺される——動物実験の闇を探る』、同時代社。
ブリット・レイ、『絶滅動物は蘇らせるべきか？ 絶滅種復活の科学、倫理、リスク』高取芳彦訳、双葉社。
ドミニク・レステル、『肉食の哲学』大辻都訳、左右社。
ディネシュ・J・ワディウエル、『現代思想からの動物論——戦争・主権・生政治』井上太一訳、人文書院。

2021 年

浅川満彦、『野生動物の法獣医学——もの言わぬ死体の叫び』、地人書館。
浅野幸治、『ベジタリアン哲学者の動物倫理入門』、ナカニシヤ出版。
石川伸一、『「食」の未来で何が起きているのか——「フードテック」のすごい世界』、青春出版社。
ベンジャミン・クリッツァー、『21 世紀の道德——学問、功利主義、ジェンダー、幸福を考える』、晶文社。
澤井努、『命をどこまで操作してよいか——応用倫理学講義』、慶應義塾大学出版会。
田上孝一、『はじめての動物倫理学』、集英社。
ポール・B・トンプソン、『食農倫理学の長い旅——〈食べる〉のどこに倫理はあるのか』太田和彦訳、勁草書房。
長谷川晃他編、『法の理論 39——特集《「動物の権利」論の展開》』、成文堂。
長谷川晃他編、『法の理論 40——特集《カントにおける法秩序と他者》』、成文堂。
ジェイシー・リース、『肉食の終わり——非動物性食品システム実現へのロードマップ』井上太一訳、原書房。

2022 年

井上太一、『動物倫理の最前線——批判的動物研究とは何か』、人文書院。

鵜飼哲、『動物のまなざしのもとで——種と文化の境界を問い直す』、勁草書房。

打越綾子、『動物問題と社会福祉政策——多頭飼育問題を深く考える』、ナカニシヤ出版。

片桐雅隆、『人間・AI・動物——ポストヒューマンの社会学』、丸善出版。

ジェニー・クリーマン、『セックスロボットと人造肉——テクノロジーは性、食、生、死を“征服”できるか』安藤貴子訳、双葉社。

佐々木正明、『「動物の権利」運動の正体』、PHP 研究所。

佐渡友陽一、『動物園を考える——日本と世界の違いを超えて』、東京大学出版会。

メラニー・ジョイ、『私たちはなぜ犬を愛し、豚を食べ、牛を身にまとうのか——カーニズムとは何か』玉木麻子訳、青土社。

新村毅、『動物福祉学』、昭和堂。

西川ふさい、『世界動物福祉訪問記』、日本橋出版。

日本実験動物医学専門医協会(JCLAM)編、『米国獣医学会 動物の安楽死指針（安楽死ガイドライン）——2020年版』、アドスリー。

ティモシー・パチラット、『暴力のエスノグラフィー——産業化された屠殺と視界の政治』小坂恵理訳、明石書店。

ブライアン・ヘア／ヴァネッサ・ウッズ、『ヒトは＜家畜化＞して進化した——私たちはなぜ寛容で残酷な生き物になったのか』藤原多伽夫訳、白揚社。

谷津裕子、『動物——ひと・環境との倫理的共生』、東京大学出版会。

トム・レーガン、『動物の権利と人間の不正——動物倫理入門』井上太一訳、緑風出版。